

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 21 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770007

研究課題名(和文) ジョルダノー・ブルーノと世界の複数性：メルセンヌとライプニッツからの批判を通して

研究課題名(英文) Giordano Bruno's philosophical thought on the plurality of worlds

研究代表者

岡本 源太 (OKAMOTO, Genta)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：50647477

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ジョルダノー・ブルーノの「世界の複数性」の思想を調和も照応もなき多様性の哲学として読み解き、多様なものの共生という現代的課題に新たな視座を提起することを目的に、(1)ブルーノ『しるしのしるし』(1583)に見られる世界の複数性の存在論的基盤・倫理的含意、(2)世界の複数性の概念史におけるルネサンス・近世の音楽論の重要性、(3)ルネサンス哲学から近世自由思想に継承された自然主義的循環史観の重要性、を解明した。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to reconsider Giordano Bruno's philosophical thought on the plurality of worlds from the following three points of view: (1) the ontological base and ethical connotation expressed in Giordano Bruno's *Sigillus sigillorum*, (2) the Renaissance music theory as part of the intellectual history of the plurality of worlds, (3) the naturalization of cyclical view of history in Renaissance and Early Modern philosophy. The research succeeded in revealing the significance that Bruno's theory on the plurality of worlds still retain in our days.

研究分野：人文学

キーワード：ジョルダノー・ブルーノ マラン・メルセンヌ ガブリエル・ノーデ 世界の複数性 多様性 調和
循環史観

1. 研究開始当初の背景

従来のブルーノ研究では、おもに自然哲学に関心が向けられてきた。西洋中世の閉じた位階的世界像を批判し、宇宙の無限性と世界の複数性を主張したブルーノの自然哲学の革新性は、カッシーラー『個と宇宙』(1927)やコイレ『閉じた世界から無限宇宙へ』(1957)といった古典的研究を通してよく知られ、ヴェドリーヌ『ブルーノにおける自然の概念』(1967)からテッシチーニ『無限の輪郭』(2007)にいたる研究蓄積がある。しかし近年の影響作用史研究によって、イギリス自由思想・フランス啓蒙主義・ドイツ観念論へと続くブルーノ哲学の歴史的影響力が、西洋近代の自然像ばかりか、人間像にも及ぶことが明らかになった(リッチ『ブルーノ思想の運命』1990、『ブルーノ復活』からイタリア人達のブルーノへ』2009ほか)。そのため、自然哲学に限定されないブルーノ研究の必要性が国際的に認知され、研究が活況を呈している。

そこから私は本研究開始以前、ブルーノの人間概念の解明に取り組んだ。ブルーノによれば、人間も牡蠣も蠅も植物も自然の一様態であって、理性などによって優劣が定められてはいない。存在の階梯や万物の照応は否定され、人間の生はいかなるヒエラルキーにも収まらない無限の多様性をもつとされる。生の多様性を「人間の尊厳」と見なす考えは、ブルクハルトの古典的研究『イタリア・ルネサンスの文化』(1860)以来、ルネサンスにおける「人間の発見」として広く知られる。だが、ピコ・デラ・ミランドラを一つの頂点とするルネサンス哲学では、その多様性は個々人の可能な生の選択肢の多様性だった。対するブルーノは、それを現実の多様性とし、この世界に実際に生きる人間たちの多様な生の共存を論じた点で革新的だったことを、私は明らかにした。

この知見をもとに、新たに問題として浮上したのが、本研究の課題たる「世界の複数性」であった。宇宙の広がりだけでなく、世界の数と多様性も無限だとするブルーノの「世界の複数性」の思想は、従来はただ自然科学上の学説とされがちであった。ブルーノの複数世界論が現代の多元的宇宙論の先駆であることについては、デル・プレテ『無限の宇宙と世界の複数性』(1998)や、セイデンガール『神、宇宙、無限空間』(2006)などの詳細な研究がある。しかしそこには、「生の多様性」を主張する倫理が含意されている。その解明は、メルセンヌやライプニッツはじめ西洋近代に多くの反響を呼んだブルーノ哲学の隠れた影響力に鑑みて、重要な課題と言えた。

2. 研究の目的

以上から本研究では、近年のジョルダノ・ブルーノ影響作用史研究の飛躍的進展を踏まえて、彼の「世界の複数性」の思想を調和も照応もなき多様性の哲学として読み解き、多様なものの共生という現代的課題に新たな視座を提起することを目的とした。一般にブルーノの複数世界論は、現代の多元宇宙論の先駆として名高いが、実際の歴史的反響からすれば、実は自然科学のみならず、多様な生の共存の倫理としても西洋近代に多大な影響を及ぼしたのである。そのため、ブルーノの「世界の複数性」の思想を取り上げ、メルセンヌとライプニッツによるブルーノ批判と対照することで、近代以降の人間像と世界像の根幹にある「多様性」概念の再考を目指した。

3. 研究の方法

研究計画としては、ブルーノとメルセンヌ／ライプニッツとの比較対照を主要な方法

としながら、三つの段階を踏んで進めることを構想した。

(1)「世界の複数性」の倫理的主張を明確化するために、ブルーノ『しるし論』『原因論』『無限論』『最小者論』とメルセンヌ『理神論者の不敬虔』を中心に、読解と比較検討をおこなう。

(2)「多様性」の哲学的基礎を解明するために、ブルーノ『無限論』『無窮論』と「ライプニッツ＝トーランド往復書簡」を中心に、読解と比較検討をおこなう。

(3)「生の多様性」の意義を検討するため、ブルーノ『聖灰日の晩餐』を中心に考察する。

4. 研究成果

まずは研究計画にしたがってブルーノとメルセンヌとの関係を検討することから取り組み始めたが、そこに当初の想定よりも大きな課題があることを認めたため、研究計画を変更してブルーノとライプニッツとの関係の検討には踏み込まず、ブルーノとメルセンヌ、およびルネサンス哲学と近世自由思想の哲学的・思想史的關係に考察を集中した。

主要な成果は、以下の三点にまとめられる。

(1)ブルーノ『しるしのしるし』(1583)の翻訳・注釈を通じた「世界の複数性」思想の存在論的基盤および倫理的含意の解明。そこから『しるしのしるし』の翻訳注釈のうち、第1部第1節から第23節までを公表した。残りに関しても、今後公表していく考えである。

(2)世界の複数性の概念史におけるルネサンス・近世の音楽論の重要性の解明。西洋思想における宇宙論と音楽論の密接な関連は、古代のピュタゴラス主義以来のものではあるが、天動説から地動説への転換や火星の楕円軌道の発見などが相次いだ近世の宇宙論においても、モデルとしての音楽論の重要性はいささかも衰えてはいないことを、とりわ

けメルセンヌの著作の検討から確認した。複数世界における調和概念と多様性概念の結合と乖離を理解するうえでも、モデルとしての音楽論は看過し得ない重要性をもつだろう。

(3)ルネサンス哲学から近世自由思想に継承された自然主義的循環史観の重要性の解明。とりわけ、当初の計画ではブルーノとメルセンヌとの比較対照の際の補助線として考えていた自由思想家ガブリエル・ノーデが、この点でのブルーノ受容においてきわめて重要な役割を担っていたことが分かった。

当初は計画されながらも果たせなかったブルーノとライプニッツの比較対照については、本成果をもとにして今後取り組む考えである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

岡本源太「ルネサンスの芸術論と時間の問題　アルベルティからジョルダノー・ブルーノまで」、『美学』第64巻1号(242号)、美学会、2013年6月、15-25頁、査読なし

岡本源太「ジョルダノー・ブルーノにおける永遠と時間」、『新プラトン主義研究』第13号、2014年、23-29頁、査読あり

[学会発表](計1件)

岡本源太「自己のエクリチュール　ルネサンスから偉大なる世紀へ」、シンポジウム「嘘からでる真実　嶋中博章『太陽王時代のメモワール作者たち』と、文学表現としての歴史記述」、岡山大学(岡山)、2014年10月4日

[図書](計0件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

【翻訳・注釈・解題】ジョルダナーノ・ブルーノ『しるしのしるし』（第1部第1節～第23節）岡本源太訳、『あいだノ生成』第6号、あいだ哲学会、2016年、163-171頁（解題163-164頁）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 源太 (OKAMOTO GENTA)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：50647477

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：